

# FEMME POLITIQUE

ファム・ポリテイク NO.56 CONTENTS

<教育特集>

ツギハギだらけの年金行政……2 日本キリスト教婦人矯風会……5

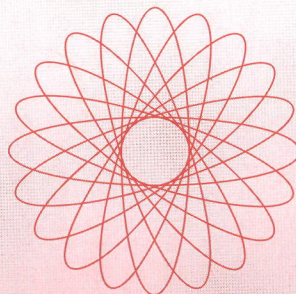
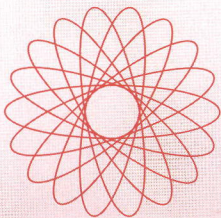
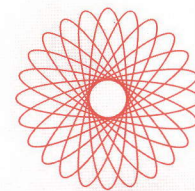
フランスはどこへ行く?……6

「戦争のできる国」への歩み……8

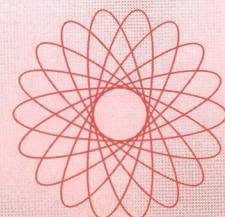
地方議会は密室の八百長試合!……10

一党独裁をしたたかに生きる ベトナム人のエネルギー……14

書評 軍事を知らずして平和を語るな……19



女だから、政治!



# ツギハギだらけの年金行政

仲野マリ

少子高齢化が急激に進む中、マジメにやっていたって「危ない」とウワサが絶えなかった年金制度。ここに来て、ついに屋台骨から崩れ出した。

どうしてこんなことになったのか。年金制度そのものが持つ、根本的なデータミスに、今こそ目を向けなければいけない。

## ▼あきれた「入力ミス」

今回、もっともセンセーショナルに報道されたのが、「一人に一つ割り当てた年金番号に統合できていない年金が、五千万件もある」というニュースだった。いわゆる「宙に浮いた年金」である。

日本は赤ん坊も含めて一億二千万人しかいないのに、その半分が誰のものか特定できていない？ そんなふうにかんちがいしてしまった人も

多いと思う。

実は1997年の時点で、何と年金記録が3億もあったという。一人でいくつもの年金手帳を持っているのを一つにまとめようというのが、この年に決まった基礎年金番号の統一なのである。

それから10年たつても「名寄せ」ができていないものが5000万件残っている、ということなのだ。その検証の過程で明らかになったのが、あまりに初歩的な入力ミスの横行だった。

なぜ社会保険庁は、これほど非常識な集団になつてしまったのだらう。

それは組織の三層構造にあると言われている。まずは、厚生労働省のキャリア組。在任期間が短く、すぐに本省に戻るの、自分のいる間に大きな問題を解決することは難しい。それが先送りの事なかれ主義の土壌を生んでいったと言える。

次に、社会保険庁本庁の職員。ここでは国民から直接集

金する業務などがなく、そういう現場との人事交流もない。自分たちが右から左へと動かしている「億」単位のカネが、どんな人々からどれほど苦労して集められたものなのかなど、知るよしもない。

そして末端が、現在「入力ミス」や「対応の悪さ」で毎日のようにたたかれている都道府県単位で採用された社会保険事務所の職員である。

1985年、コンピュータによるオンライン化を導入した時、当時オンライン化に反対だった労働組合は「コンピュータ作業は負担が重い」と極端に入力作業を制限する労働協約を結んで効率化を妨げた。その分アルバイトによる作業が増え、責任を自覚することなく入力が行われていった。

カタカナで氏名を入力する際、「幸子」を「サチコ」か

「ユキコ」か確認しなかった、などというのはまだまだなミス(?)で、「トシコ」が

「トミコ」となっていた人もいる。これでは探すに探せない。単純な入力ミスは、住所や生年月日にも及んでいる。

こうして誰のものかわからなくなつてしまった年金記録は、放置され続けた。

その上、入力そのものがされていない、「消えた」年金記録も相当な数にのぼり、それは「5000万件」の他に、あることがわかつてきた。

彼らもまた、「年金」とは国民から預かった「他人のカネ」で、40年後にその書類を証拠として確実に支払わなければならぬものという自覚と責任感が欠如していたと言わざるを得ない。

## 最初から払う気のない「申請主義」

3年前の「未納問題」の時

にも話題になったが、年金のトラブルの多くが「申請主義」に端を発する。

保険料は税金と同じようにほとんど強制的に徴収されるのに、いざ年金をもらう時期になると、すべての書類を揃えてこちらから出向かねばならない。申請がなければ、国はビター一文払わなくてよいシステムになっているのだ。

保険料を支払ったという証拠(年金手帳や領収書)を国民の方が用意できなければ、職員はコンピュータの画面をのぞいて「そういう記録はありませんねー」と言っている。

社保庁の幹部によると、「自分たちで5000万件の中身を精査する」という発想はまったくなかった」という。

安倍晋三総理大臣も、今はやっきになって「領収書を持ってこいとは言いません」と低姿勢だが、5月の時点では「じゃあ、払ったと言われた

ら誰にでも支払うんですか？」と、領収書などの確固たる証拠を提示する責任は、支給を希望する側にある、と気色ばんだ。

社保庁の事務処理の過程で生じた混乱なのに、真偽を確かめる責任が社保庁にあるとは考えないのである。

しかし、安倍総理だけを非難することはできない。そもそも、「年金」は、「支払い」を度外視して生まれた制度なのだから。

### 戦費調達が目地的だった厚生年金

1940年（昭和15年）、民間の公的保険として初めて船員保険が作られる。日中戦争も泥沼化した頃だ。

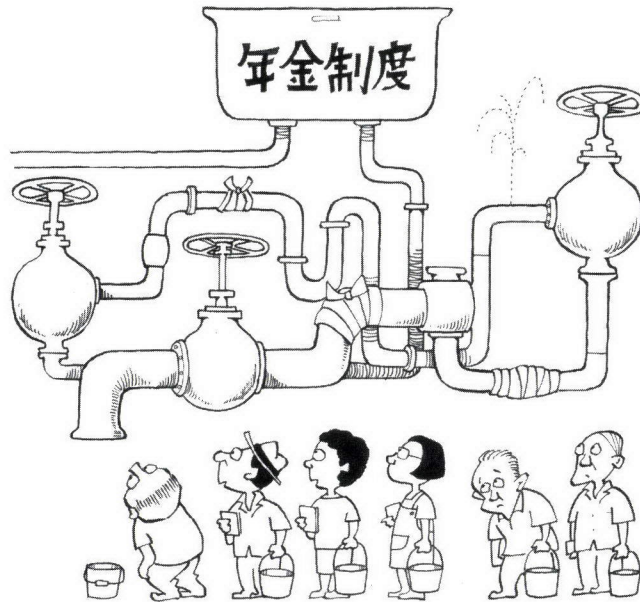
これには軍人への手厚い恩給制度との落差があった。軍の徴用で物資を運ぶ船が攻撃され船員が死傷しても、何の保障もつかない。軍の任務と同じく危険なのに、という不公平感が募った。だから、船員保険は労災や医療保険もついて、厚生年金とは性質が少し違う。

遅れること2年、1942年（昭和17年）、厚生年金の前身「労働者年金保険法」が制定された。太平洋戦争の真つ只中である。

これは国民への福祉政策として設立されたのではない。徴収された船員保険、厚生年金の保険料は特別会計に繰り込まれ、当時の大蔵省預金部が「運用」した。要は「国債」を買って、不足していた軍事費に充てるためだった。

め、戦費調達のツールにするという方法を考え出したのは、プロイセン（ドイツ）の宰相ビスマルクである。このしくみのインチキキなどは、将来年金として国民にカネを支払おうなんて、ハナから考えていない点。

前述のとおり、軍人には恩給制度があった。1875年（明治5年）に早くも設立され、遅れて1884年（明治14年）、文民つまり公務員に対する恩給もスタートする。「恩給」とは、「国家」に



え・西田淑子

今のシステムでいえば「事業主である国が100%拠出、保険料ゼロ」である。

戦後、年金制度はほとんど同じシステムのまま残ったが、この「恩給」制度だけは、手を加えられた。「一円も保険料を出さない年金」なんて、ありえないからである。その結果生まれたのが、厚生年金と同じく半分が保険料、半分が事業主拠出（つまり国や地方自治体）という共済年金である。

1948年に国家公務員共済組合法、1962年に地方公務員共済組合法が成立、ここに恩給法は廃止される（ただし旧日本軍人に対する恩給は、旧法のままその後も給付され続ける）。

こうした歴史的背景を見ると、共済年金は厚生年金と違って、明治の初めから何をおいても「給付」できるように作られていることがわかる。他の年金より恵まれていると感じられるのは、恩給時代の特典をまだいくつもひきずつているからだろう。

### 問題だらけの国民年金

地方公務員共済組合法が成立した1962年（昭和37年）、同じく国民年金制度もできている。戦後の財政再建

「年金を特別会計にし、国債を買って赤字埋めに使う」というこの構図は、今もまったく変わらない。（ファミポリティック52号「国家財政は借金だのみ」参照）

「年金保険料」という名目で国民から強制的にカネを集

それは年金支給開始年齢が55歳なのを見ればわかる。なんと、当時の平均寿命は50歳だったのだ！

### マッカーサーも呆れた「恩給制度」

対して奉公した者に、天皇が恩を給う、という意味だ。厚生年金が、年金を受ける本人の保険料と事業主からの拠出金で賄われるのとは違い、恩給は、国が全額負担していた。当時の感覚では「天皇のポケットマネー」であり、

政策が効果を挙げ、オリンピック景気で経済も上向きの頃である。

ずっと蚊帳の外だった自営業の人たちにも年金ができて、これにより、いわゆる「国民皆年金」が実現した。但し、サラリーマンの妻（いわゆる専業主婦）は、原則無収入なので、任意加入とした。払わなければ、無年金である。

国民年金には当初から問題がたくさんあった。払いやすいようにと掛け金を安くしたので、当然支給される額も少ない。おまけに厚生年金や共済年金では拠出金を全体の半分出している「事業主」が自分であることからその分の上乘せがない。

本来、拠出金に当たる部分（つまり半分）を国庫（税金）が負担する約束だったが、「予算がない」ということで、完全には実現していない。最初から空手形を切られた見切り発車の年金なのだ。

また、「皆年金」といっても収入が少なければ支払えないので、給料から天引きできない他の年金と違い、どれだけの金が入ってくるかが把握できない。

こうして、平均寿命がのび始め、年金給付の総額が多くなってくると、支給の見通しが立たなくなってきた。

## 基礎年金制度は 財政事情だけを考えた 思いつきと妥協の産物

そこで国は、これまでは自営業者に対する年金だった国民年金相当の支給分を「基礎年金」という名前にして全国民一律とする（1985年）。その時、今までは「払いやすい」を第一に考えてきた国民年金保険料を、「もうらう額」を基準に算定して引き上げたのだ。

さらに、①これまで任意加入だったサラリーマンの妻も国民年金に強制加入させるが、②妻の保険料はサラリーマンである夫が自分の保険料とともに厚生年金を通じて支払う、というウルトラCを考え出した。

これにより、当時はまだ潤沢だった厚生年金の一部が、「基礎年金」という形で国民年金に振り替えられることとなった。しかし、サラリーマンといえども一馬力でない限り二人分の保険料を支払えるわけがない。抵抗が強かったため、保険料は据え置くことにした。

保険料は上げず、二人分をどう支給するか？

結局、「夫婦仲良く添い遂げれば、夫婦合算の年金支給水準額は今まで通り。但し、

独身を通したり、死別や離婚をすると妻の基礎年金分だけ給付が下がる」ということになった。その結果、同じだけ保険料を納めても、配偶者の有無で給付される年金額に差がつくという、公平性を欠く制度となったのである。

しかも、厚生年金の報酬比例分は夫に独占されてしまい、妻側にはいっさい来ない。それで、今度はその点を何とかしようと、2007年から離婚した女性に半分厚生年金がいくように、またまた小手先の修正を加えた。

最初から財源の見直しも甘く、その場しのぎの行き当たりばったりで改悪を重ねてきた年金制度は、完全に制度疲労を起している。

1997年の基礎年金番号統一開始に当たり、「事業主（企業）」が管理する厚生年金、「市町村」が管理する国民年金を一括管理するために、これまで市町村の長が責任を負っていた国民年金の事務が社保庁に移管された。市町村の納付記録は、それ以降5年を超えての保存義務がなくなる。

現在、一部の原簿台帳が破棄され、コンピュータ上のデータと突合せができないのは、この時の事務移譲が、責任をもって慎重に行われてい

なかった上に、社保庁から「破棄してよい」と通知が来たからである。全1827市町村のうち、破棄したと回答した自治体は191あった。

あちこちのネジがはずれ出し、一つひとつを拾って締め直そうとしても、組み立て工程そのものが間違っているのだから、いつか空中分解してしまうのは目に見えている。いまやその実体が、ようやく国民の目に見えるようになった、というべきか。

## 社保庁解体・民営化で 年金制度は救えるか？

「社保庁はデタラメ」「親方日の丸の考え方を改めなければならぬ」「民営化すれば、迅速に解決する」。

政府・与党はここぞとばかりに社保庁の職員をたたき、社保庁を解体して「ねんきん事業機構」を立ち上げようと言語を荒らげる。

しかし、ちよつと待て。景気の浮き沈みなどで倒産しない、「親方日の丸」は、安心の旗印ではなかったのか？

柳沢伯夫厚生労働大臣は6月12日の参議院厚生労働委員会、かつての厚生官僚について「（厚生年金の）草創期は今考えると、とても支持できない乱暴、粗雑きわまり

ない議論があった」と述べている。

では、法案提出からたった4時間の「審議」で強行採決した「社保庁改革法案」は、未来の厚生労働大臣から「乱暴、粗雑きわまりない議論があった」と誇りを受けない自信があるのだろうか。

この「改革法案」からすると、社保庁は3年後に「ねんきん事業機構」となるべく、現場の正規職員からほとんど減らされていく。これから「宙に浮いた年金」「消えた年金」「未入力の年金」をすべて台帳と突き合わせ、同時に国民に対して丁寧な対応をしていくことが必要だということに、マンパワーは足りるのだろうか。

既に「ようやく電話が通じた」と思ったら、出てきた相手は派遣の素人で、年金のことは何もわからず謝るだけ」といった苦情が噴出している。

年金の照合費用だけでも、1000億円はかかるのではないかと言われる。この事態に、またぞろその場しのぎで数年持ちこたえればよしとするのではなく、今度こそ将来を見据え、本腰を入れて安定した年金制度の構築させなければならぬ。

（なかのまり・フリーランスライター）

# 日本キリスト教 婦人矯風会

田中喜美子

▼一八七四年（明治五年）、アメリカ・オハイオ州の小さな町で、飲酒の害をなくそうと一人の女性が立ち上がる。町中の酒屋を廃業に追い込んだこのささやかな禁酒運動こそ、その後「世界キリスト教婦人矯風会」となって世界各国にひろがる大運動の始まりであった。

「日本キリスト教婦人矯風会」は、アメリカ発のこの運動の流れを汲み、明治一九年（一八八六年）東京に誕生した。以来一二〇年、「矯風会」は日本のもっとも長い伝統を持つ女性運動として活動をつづけている。

正役員は明治一九年の発会以来すべて女性。初代「会頭」であり、その後女子学院の校長となった矢島楯子の名を知る人はいまも少なくない。しかし日本の矯風会は、禁酒運動を中心とするアメリカの運動とは大きく異なる方向

たのだ。

当時矯風会の最大の目的は公娼制度の廃止にあったが、その当然の結果として、娼婦として売られた女性たちの救済を視野にいれることが必要となってくる。こうして明治二七年、東京の大久保に建てられた「慈愛館」は、生きる道のない当時の女性たちに職業訓練を与える福祉の場となった。慈愛館建設のため浄財をつのり、幹部たちが大金を貸して手に入れたその土地は、現在も矯風会の活動をささえる大きな拠点となっている。

大正五年、大阪府庁が飛田に遊廓設置を許可しようとしたとき、矯風会は全国で反対の大運動を展開する。運動は敗北して会員は涙にむせんだが、このときの運動は「矯風会」の名を全国にとどろかせた。しかし公娼制度廃止の悲願は、婦人参政権と同じく、太平洋戦争の敗戦まで叶えられることはなかった。男社会の壁はそれほど厚かった。

▼これらの活動の過程で、矯風会のメンバーが「政治」に目ざめたのはいわば当然の成り行きである。矯風会は婦人参政権を求めて市川房枝らと行動をともし、後に第七代会頭となる久布白落実は、昭和四六年、総選挙に出馬して

惜しくも落選している。

▼時代とともに矯風会の活動内容も変化してきた。現在の矯風会は「平和」「性・人権」「酒・たばこの害防止」を三つの目標としてかかげ、前世代から引き継いだ活動を展開している。北海道から沖縄まで、全国七六か所の支部の存在は歴史の重みを感じさせ

る。明治二六年、「東京婦人矯風雑誌」のタイトルで発行され始めた機関誌は、会の活動が政治色を帯びるに従い、何度も発行停止の憂き目にあっているが、いまは隔月刊の「婦人新報」となって発行されている。

「婦人新報」のほか、別組織の「売買春問題」とりくむ会」が出している隔月刊のニユースレターはB4判二ペー

載するなど、その時々々の政治的活動を伝えて、気迫のこもった編集ぶりだ。

▼国籍を問わず緊急保護を要する女性のシェルターとして、創立一〇〇周年の一九八六年、女性の家「HELP」が発足した。人身売買被害者から、近年では日本人の夫の暴力に悩む女性や母子の来所が増えた。さらに单身女性のための宿泊所「矯風会ステツプハウス」は、さまざまな理由で家を失った女性たちに、原則六か月の滞在を保障して自立への足掛かりをつくっている。

▼矯風会の活動は、夫の暴力に苦しむ妻にせよ、売買春業者のえじきとなる国内・国外の女性にせよ、時代によって対象こそ変われ、つねに被害者としての女性の側に立ち、寄り添おうとする姿勢が印象的である。

その一方、この会の姿勢は一般に考えられているよりはるかに政治的・戦闘的であった。女性問題のもっとも暗い部分に先鋭的に切り込み、男社会にゆすぶりをかける姿勢は昔も今も変わらない。思えばそれがクリスチャンの本質ではないだろうか。（連絡先03・3361・0934）  
（たなかきみこ・ファムポリテイク編集長）



矢島楯子（矯風会提供）

サルコジ大統領の登場で、「フランスよ、お前もか…」と思った人も少なくないことだろう。一般に、サルコジはリベラルな親米家で、内務大臣として過激な言動が目立つ保守の急先鋒、というイメージがある。すわ、あのフランスも保守化した、という危機感が湧いて当然だ。ここはひとつ、冷静な目でフランスの内情を追ってみたい。

めでなく、サルコジの具体的な政策に「ウイ」と頷いて、人々は投票した。これは様々な分析結果が明らかにしている事実だ。

ではフランス人は、サルコジに何を託したのか。わかりやすいところから、まずは治安と移民の問題。二年前に勃発した大都市周辺での「暴動」はまだ記憶に新しいが、あれは単なる治安上の問題ではなく、移民問題と密接に絡み合

社会にしたのは、いったい誰なのか。移民や亡命者を受け入れる寛容な国フランスを謳うのは誰にとっても心地よいが、最低限のモラルや社会の

決まりごとさえ守れない子どもたちを輩出してしまふ社会というのはい体何なのだろう。国民のひとりひとりが真剣に問いかけた。二番目に挙げられるのは、出口なしに見える失業問題。特に深刻なのは若年層の失業

# フランスはどっちへ行く？

浅野素女

まずは五月の大統領選挙結果だが、ここ数年、フランス人は常に何かに「反対するため」、「不満をぶつけるため」に投票してきた。つまり、現状への不満や不安の表明としての投票だ。それが極まって、前回の大統領選では、極右候補がシラク大統領と一騎打ちという、誰も予想しなかった苦しい結果を招いた。今回

の大統領選はまったく違った。現状に「ノン」というた

っていた。社会党政権が八〇年代から進めた移民同化政策が失敗に終わったことを、誰もが認めざるを得なかった。

「暴動」の際、サルコジ内務相の「過激な」発言は非難を浴びたが、あのような形の暴力を誰が容認できようか。暴徒が燃やしたのは名もなき庶民の車だった。やっこの思いで生活をしている人たちの車や、子どもたちが使う体育館だった。そんな蛮行を許す

率。若者が仕事を見つけられない、ということは未来に希望が持てないということと同じだ。

最大の問題点は、人件費が異常に高いということ。社会保障費が給料分と同じくらい高くつくので、人ひとり雇うことは相当の覚悟と見通しがないとできない相談だ。おまけに、雇ったら最後、解雇するのかもしれない。ひとつまらげれば、労働裁判所に訴えら

れかねない。

労働者の権利が徹底して守られているのはいいが、あまりに柔軟性に欠ける。

社会全体としても、システムが硬直化している。「改革」が提案されるたび、全国規模のストに発展する。

労働組合が強いのは頼もしい。だが、何でもかでも反対、というのは決して前向きではない。特に、既得権にしがみついた公務員のあり方に納得できないものを感じている国民は多い。

さらに、社会党政権下で導入された三五時間労働制。三五時間労働で社会がまわってゆくなら、それはそれでよい。

だが、中小企業はその波をもろに受けた。ひとりの労働時間が少なくなれば、ほかに補充要員が必要だ。しかし、多くの中小企業経営者にとつて、そのひとりを雇う余裕はない。

そればかりか、大企業に勤めている人たちは権利が守られているから休日が増えて万々歳だが、少ない給料で月末は赤字、というような人たちは追い詰められる。もっと働きたいけれどできない。

一方で、ヴァカンスに行くことが、余暇を楽しむことばかりがもてはやされる社会になり、ある意味で労働の価値が

貶められてしまった。

成功したい、もっと豊かな生活をしたい、と願って身を粉にして働くことは悪いことなのか？

もちろん労働者が搾取されては困る。だが、働きたい人が働けない、雇いたい人が雇えないガチガチのシステムはどこかおかしい。

左派は、弱者への連帯を主張して、生活保護など、国の援助額を上げることを主張するが、ちよつと働くより生活保護を受けていた方が楽だと計算して働かない人も少なくない。そうした「保護慣れ」の蔓延も問題だ。

視点を国外へ広げれば、二〇〇五年、ヨーロッパ憲章が国民投票で否決された。これは、EUの将来なんぞより今日の自分の生活の方が大切、と国民が宣言したようなものだ。フランス人の多くがここまで内向きになってしまった。

それは、失業や治安への不安に国全体が蝕まれていることの証である。この否決によって、フランスはEUを牽引してゆく外交上の主導権をも失ってしまった。

これだけ並べれば、いかにフランスが袋小路へ入っていったかがわかりただけだろうか。「二五年間の停滞」を抜け出したい、と国民が願っ

て当然だろう。フランス自身  
が変わらなければ、もうどう  
しようもないところへ来てい  
る。そういう思いを抱えて、  
サルコジに票を投じた人たち  
は、サルコジの政策を支持し  
たのだ。八割という高い投票  
率が、政治への期待と関心を  
示している。

サルコジの提案は具体的で  
ある。教育制度に関しては、  
学区制の廃止をめざす。そう  
することによって、住んでい  
る場所で教育に格差が出るこ  
とを抑える。社会格差の問題  
は都市構造の問題であり、ま  
た教育の問題でもあるから  
だ。「暴力」や「非行」に対  
しても、サルコジは断固たる  
姿勢を見せている。一六〜一  
八歳の未成年者でも、再犯の  
場合は、未成年であることを  
理由に処罰を逃れることはで  
きなくなるだろう。

経済政策の最大の目玉は、  
労働の価値を再評価する姿勢  
だ。働きたい人はもっと働け  
る社会にする。そのために三  
五時間制度を見直し、二五％  
増額で残業も認める。その分  
には所得税をかけず、雇用側  
は社会保障費を免除される。  
契約の形をシンプルにし、柔  
軟性を持たせる。同時に、権  
利には常に義務が伴うことを  
徹底させる。失業者がいつま  
でも失業状態に依存しないよ  
うに職業安定所の在り方を見  
直す。

また、税制の改革で資産保  
護をある程度強化する。これ  
は金持ち対策と批判されても  
いるが、フランスの税制は裕  
福層に極端に厳しい。ある程  
度の資産を持った人たちは資  
産を守るために近隣諸国へ移  
住を余儀なくされるほどだ。  
何もスターばかりでなく、無

名の企業経営者で隣国に住所  
を移している人は多い。  
金持ちになることが多い。  
いわけではなく、その金がど  
う運用されるかが問題なほ  
ず。「努力して成功して何が  
悪いのか？」という開き直り  
を揶揄する向きもあるが、こ  
の辺のタブーも、サルコジは  
打ち破ろうとしている。  
ストライキの権利について  
は、権利そのものは否定しな  
いが、鉄道などの公のサービ  
スに関しては、最低限の保証  
を約束させる。

つまり、スト期間中でも、  
最低限の国鉄の運行は確保す  
ること。学校では、ストの最  
中でも、子どもを受け入れる  
体制をつくること。  
これまでのフランスでは、  
ストする側に文句を言おうも  
のなら、村八分にされかねな  
い雰囲気があった。

労働者の権利は守られて当  
然だし、権力に抵抗するには  
ストしかない、と言われれば  
それまでだ。しかし、何でも  
力づく団交、ぶつかり合いし  
か突破口がない、という姿勢  
に疑問を感じている国民は少  
なくない。

本来、政治とは、まさに  
「力づく」を避ける方便なの  
ではないか。フランス人が政  
治に希望を失っていたとした  
ら、それは粘り強い交渉や駆  
け引きや妥協を信じられなく  
なったせいだったのではない  
か。政治は「妥協」の産物で  
ある。異なる利害を共存させ  
るには、相互が「妥協」する  
しかない。  
サルコジの手腕は、組閣直  
後から発揮された。

まず、労働組合代表を一堂  
に集めた。驚いたことに、組  
合代表たちは、みなニコニコ  
顔で会場を後にした。  
グローバルゼーション化は  
好むと好まないにかかわら  
ず、着々と進行している。  
その現実をしつかり見つ  
め、社会の変化を先取りして、  
労働組合も脱皮しなければい  
けない。  
力で対抗するだけでなく、  
フランス社会全体の活性化を  
めざして、これまでとはちが  
った形で責任を担い、国の政  
策と積極的に手を結ばなくて  
はいけない。

を吹き込むことが必至なので  
ある。  
彼は公私ともに、経済界や  
メディア界と太いパイプでつ  
ながっており、その点を権力  
の集中として批判されること  
が多い。  
しかし、サルコジは初めて  
の移民出身の大統領。歴代の  
大統領のように、高級官僚輩  
出機関ENAを出ているわけ  
でもない。かなりの「異分子」  
である。だからこそ、野心は  
人一倍。努力と意志の人であ  
る。フランスに欠けていたの  
は、まさにこうしたパワーで  
あったのかもしれない。  
伝統の上にあぐらをかいて  
恩恵を寝て待つ御曹司の姿勢  
ではなく、目標を持ち、政府  
のチームワークを発揮し、硬  
直化した社会にエンジンをか  
けること。問題の在処を切開  
して膿を出させる勇気と行動  
力を持つこと。  
サルコジの野心が国民の願  
いとずれを見せたら、国民は  
さっさと背を向けるだろう。  
サルコジは人一倍、国民に  
愛され、評価されたいという  
思いが強い人だ。だからこそ、  
本心に「革新する保守」とし  
て時代を画する大統領になれ  
る可能性もある。国民はそこ  
に賭けたのだろうか。  
(あさのもとめ・フリーランス  
ライター)



え・西田淑子

# 「戦争のどじやる国」への歩み

山口遼子

教育「改革」、憲法「改正」、  
はては家庭教育にまでお上の  
意向を反映させようともくろ  
む安倍内閣。その果てに何が  
待っているのか。

戦後から今までの、過去六  
〇年間の防衛政策は、どう変  
わってきたのだろうか。

## ●自衛隊の誕生

一九四五年、日本は第二次  
世界大戦に敗北し、ポツダム  
宣言を受け入れてアメリカの  
占領下に入った。それまでの  
体制を一変して、民主主義国  
家を創ることを約束したとい  
うことだ。

日本の軍備は解かれ、治安  
はアメリカの陸軍が担う。

が、一九五〇年に朝鮮戦争  
が勃発すると、在日米軍の多  
くは朝鮮半島に出動すること  
になった。その結果国内の治  
安維持のために作られたの  
が、日本人を隊員とする「警  
察予備隊」という小規模な軍  
隊だった。無論、米軍主導で  
作られたものである。当初は

七万五千人の定員で、四師団  
に分かれ、軍隊と同様の階級  
制度をもっていた。また「警  
察」と名がついていても、警  
察庁の管轄ではなく、内閣総  
理大臣の指揮下にある、全く  
別の組織であった。

朝鮮戦争が終結し、一九五  
一年には「サンフランシスコ  
平和条約」が旧連合国との間  
で締結され、日本は独立国家  
と認められることになった。  
この条約は日本に「国際紛争  
は平和的に解決する」義務を  
負わせると同時に、「個別的、  
集団的自衛権を持つ」ことを  
規定している。

これは日本の「牙」を抜く  
と同時に、朝鮮戦争によって  
明らかになった米ソの「冷戦」  
体制に日本を組み込む布石で  
あった。

条約の結果として、それま  
での「警察予備隊」は、日本  
の自衛権を保持するための  
「専守防衛」を旨とする「自  
衛隊」として生まれ変わった。  
一九五四年七月一日のことで  
ある。

## ●高まる緊張

朝鮮半島を南北に分断する  
こととなった朝鮮戦争は、共  
産主義陣営（ソ連・中国）と  
資本主義陣営（アメリカ）と  
の直接対決だった。いわゆる  
東西冷戦の始まりである。

朝鮮半島はソ連と中国との  
地続きであり、日本とは海を  
へだてて直近の場所にある。  
アメリカにとって、日本と韓  
国は太平洋の向こう側にある  
失うことのできない防波堤  
（防共堤）となった。こうし  
てアメリカは、日本に平和憲  
法を作って、民主国家となる  
後押しをしたと同じその手  
で、敵対する陣営への「盾」  
となることを強く求め始め  
る。

もちろん日本の中にも、  
「自分の国は自分で守る」、要  
するに相当の軍備を持つこと  
が、国として当然の権利であ  
り義務であると考える人々が  
あった。

## ●軍備拡張へ

中曽根康弘こそ、そうした  
人々の中でも最も明確な形で  
戦後の日本を「再軍備化」の  
方向へ導いていった政治家で  
ある。

彼は一九七〇年に防衛庁長  
官となり、「防衛白書」を通  
じて独自の防衛構想を打ち出  
した。「自守防衛・非核中級  
国家構想」がそれで、自衛隊  
が独力で間接侵略を排除する  
能力を持つべきとの内容だっ  
た。

たしかに当時日本共産党  
は、「武力革命・プロレタリ  
ア独裁」のテーゼを放棄して  
はいなかった。その上もうひ  
とつ大きな背景がある。

日本はそれ以前に「日米安  
全保障条約」によって、自国  
軍は持たないかわりに米軍基  
地を整備し、一朝ことあれば  
アメリカの軍事的援助を得る  
ことができるようになってきた。が、  
当時のアメリカは泥沼化した  
ベトナム戦争により、軍事

力・経済力が疲弊しきってい  
た。そこでアメリカは一九七  
〇年代初期、「デタント（東  
西緊張緩和）戦略」をとり始  
め、ソ連に対して軟化する一  
方、アジアで局地戦が起こっ  
た場合は当事国同士で解決せ  
よ、といった始めたのである。

中曽根が「再軍備化」へと  
足を踏み出したのは、思想的  
な軍拡志向もさることなが  
ら、こうした世界情勢がステ  
ップボードとなっていたこと  
は疑いない。

とにかく中曽根は、核と長  
距離弾道ミサイル以外の兵器  
は自国で備えるべきだ、それ  
が日米中ソの勢力均衡を保つ  
道だと、強く主張したのであ  
る。

この主張は、その当時策定  
中だった第四次防衛計画（四  
次防）に盛り込まれたが、こ  
の防衛予算原案は恐るべき金  
額であった。なんと五兆八四  
億円（五カ年計画）、これは  
その前の三次防の二・二倍に  
相当する。

あまりの高額に、当時の首



相佐藤栄作は、軍国主義復活かという内外からの批判をかむすために「非核中級国家」ではなく「非核専守防衛」という言葉を用いるようにと中曽根に伝えた。そして四次防は一九七二年に、四兆六千億円という予算で成立した。

佐藤の後の田中角栄を経て首相となった三木武夫の時代には、当時の防衛局長、久保卓也の論文による「基盤的防衛構想」が取り入れられた。

その内容は「日本が直面する直接的脅威は当面存在せず、必要なのは何かあっても米軍が来援するまで持ちこたえられるだけの必要最低限の防衛力である」というものであった。さらにそのための予算は「国民総生産（GNP）のほぼ一%でよい」とした。三木内閣はこれを採択し「防衛費はGNP一%枠内」として決定したのである。

ところが一九八二年、中曽根は首相の椅子にすわるや「強いアメリカ」を目指す当時のレーガン米大統領とともに、一気に対ソ強硬路線を取りはじめた。

対米武器技術供与解禁（武器輸出三原則の適用除外化）、シーレーン強化、日本の「不沈空母化」など、戦後初めて「防衛大国」化が図られ、

その結果、一九八六年にはとうとう、GNP一%の枠を破り、大幅な防衛費の増額が決定された。現在の日本の軍拡路線は、この時点で決定されたといつてよいだろう。

中曽根内閣は長期政権だった。一九八七年まで、バブル絶頂に上り詰める日本経済とともにあったわけである。

### ●軍拡への足音

一九八九年ベルリンの壁が壊され、九一年にはソ連が崩壊、東西冷戦時代は終了した。これ以後はアメリカの一人勝ちが続く。日本はアメリカが次々に参戦する戦争に追随しながらも、アメリカの要求水準にまで達しないことを批判され続けた。日本国憲法が大きな歯止めとなっていたからだ。

だが二一世紀に入って、世界を数秒で変える出来事が起こった。9・11テロである。これは戦後日本にとつては「戦争」にまつわる一切の歯止めを破壊しかねない事件であった。

薄弱な根拠に基づいてブッシュ大統領が起こした「対イラク・テロ報復戦争」。これを強固に支援する小泉純一郎内閣は、参戦を正当化するた

め、まず法律を整えた。既存の「テロ特措法」を「イラク特措法」に、「PKO協力法」を実情に適うよう整備し、「武力攻撃事態法」、「国民保護法」などを新しくつくった。これらは「平和維持」という言葉の意味を真つ向から捻じ曲げて無理やりひねりだした「鬼つ子」である。日本国憲法は、根底から否定されたも同然だった。

アメリカに利用されることを「日米同盟」といい、近隣との信頼関係を築くよりは壊す方向に傾きがちなのが小泉一安倍内閣の本質といえよう。

ここ数年の軍事予算はやや前年を下回っている。それでも、一九九〇年代前半に急激に増えたあとの話である。では実際の軍事費とは、ど

のくらいの金額なのだろうか。並びに日本以外の国々のそれは？ 英国国際戦略研究所（IIS）が編集する「ミリタリーバランス2006年度版」の資料「国防支出と兵力の国際比較」によると、二〇〇四年度の各国の軍事支出は表のとおりである。

ただし軍事費といっても、その範疇をどこまでに定めるか、各国の通貨がドルに対して高いか安いかで実情と異なる点も出てくるだろう。あるいは各国の発表についての信憑性にばらつきがあるのも事実である。

また順位は当然、年度によって変化する。同じくIISの二〇〇二年の資料では、一位アメリカ（二九四六億ドル）、二位ロシア（五八八億ドル）、三位日本（四四四億

### 国防支出と兵力の国際比較 英国国際戦略研究所

1	アメリカ	455,908 百万ドル
2	中国	84,303
3	ロシア	61,500
4	フランス	52,704
5	イギリス	50,120
6	日本	45,152
7	ドイツ	37,790

（ドル）となっている。さらにストックホルム平和研究所の資料によれば、二〇〇三年には、日本がアメリカに次いで二位となっている。各国の調査機関によっても異なるが、日本の軍事支出が莫大なものであるのは間違いない。

防衛白書によれば、日本の軍事費の内訳は、約四五パーセントが人件費と糧食費。維持費（教育訓練費、修理費など）装備品等購入費（戦車、航空機、艦船など）がともに一八パーセント強。全体で約五兆円の防衛関係費の中で、一兆円近くが武器の購入に当てられているのである。

それでも自衛隊側からは、アメリカ以外の国との武器の共同開発や、武器輸出が禁止されていることから、武器入手に割く金額が少なすぎるといふ声があがっている。

昨今は若い人々の間に閉塞感が蔓延し、その結果他国（中国、韓国、北朝鮮など）に対する排外的・攻撃的な雰囲気や漂っている。こうした若年世代の攻撃性を、「戦争のできる国」へと誘導していくか、現在の政治状況が憂慮されてならない。（やまぐちりょうこ・フリーランスライター）

# 地方議会は 密室の八百長試合！

吉本ひろ子

私は大阪府の寝屋川という

人口二四万人の市で、「無所属市民派の女性議員」の旗を立て、一二年間市会議員をしましたが、今年引退しました。

「なぜ引退したの？」

と会う人は必ず聞きます。

「求めたものがそこになかったから」としか言えませんが、私が求めたもの、それは一言で言えば民主主義。政治

に対しての考え方は違っても、徹底して議論し、市民のために最善をつくす議員と議員。その理想を市民と一緒に追いかけたかった。

でもそこで私が見たものは、あまりにもひどい密室の八百長試合でした。

こんな議員がなぜ当選するの？

寝屋川市議会では、年四回の定例議会と一回の臨時議会が開かれます。審議は、本会議に議案を付託し、委員会が詳細な質疑と討論と採決をして決めます。

年四回の定例議会の中で一番重要なのは三月の予算議会です。三月議会には条例案がまとめて提出され、膨大な予算資料が配られます。

議員の仕事は、資料を読みこなし、問題点をつかみ、危惧される問題を議論して、行政に注意を促し、可決か否決か決定することです。

また、傍聴している市民の皆さんに内容がわかるように、また後々その議事録を読んだ方に、どんな議論を経て議決されたのかわかるように

する責任があります。

寝屋川市議会には四つの常任委員会があり、福祉と環境関係は厚生常任委員会です。関係は厚生常任委員会です。

平成一四年三月議会、厚生常任委員会では条例案が五つ提案され、その後で予算が審議される予定でした。

私はその委員会の委員ではなかったのですが、傍聴席で傍聴して見ました。顔見知りの障害者を抱える親の会の人たちも傍聴席に一〇人ほど来ておられました。

委員会の傍聴は珍しいので、障害者施策の変更に対して何らかの危惧があつて朝早くから傍聴に駆けつけているんだらうなあと感じました。

ところが、条例案の審議に入つてしばらくすると、どこからともなく「スースー」という寝息が聞こえてくるではありませんか。「えー、いつ

たい誰？」と驚いて周りを見回すと、いつものようにある議員が寝ています。

傍聴席がほぼ満席になるほど人々が駆けつけている中で、一年中で一番大事な会議会で、傍聴者との距離が五〇センチ程しかない、その眼前でこともあろうに寝息をたてて寝るとは！ずうずうしいにも程がある、なさけないにも程があると思いきや、質疑が終わって委員長が「採決します。賛成の諸君は起立願います」と言ったとたん、彼は

そーっと立ち上がったではありませんか。

五つの条例案は次々と審議されましたが、採決が終わつて席に座つてしばらくすると、また寝息をたてて寝ると、また寝息をたてて寝ると、しかし採決では必ず立ち上がるといふ信じられない器用な光景が繰り返されたのです。私は唾然としました。

一二時が来て、委員長が「暫時休憩します」と宣言し、議員たちが退席しました。

するとそれまで怒りのおさまらない顔で黙って一部始終を見ていた傍聴者の一人が、カンカンに怒って私に聞きましました。「いったいあの議員は誰ですか！」と。

私は怒り心頭の気持ちに大いに共感しながら答えました。

「〇〇議員です」と。そして、心の中で叫びました。

「この実態を絶対に忘れないでください。そして会う人に口コミで伝えてください。これが、誰を選んでもいっしょだからと選挙にいかない結果です。頼まれた人を自分の目で確かめせず、選んだ結果です」と。

なぜ寝るかという理由ははつきりしています。どうせ出てくる議案にはすべて賛成するんだから勉強する必要はない。審議を聞く気もない。

早く審議が終わることを願って、採決で起立する時だけ気をつけて立ち上げれば良いのです。

## 「自民党公認」ならば何でもできる

不思議なのは、なぜそんな人が当選してしまうのかとい

うことでしょうか。

彼は寝屋川市議会で、唯一の自民党公認候補です。人の噂では「政党にとつては、ただ一人の公認候補を落選させるわけにはいかなから政党の面目にかけて当選させるんだらう」

政党の票でかさ上げしてもらって当選した後、与党多数派に入っているだけで、数の力で守られて質問もほとんどせずに、出された議案には黙って賛成し続けなければならない。行政マンには恩を売って、市民の頼みごととはうまく処理してもらおう。

多数会派の力で、委員長くらしいの役は廻ってきます。

さすがに副議長、議長等の役は、他の議員たちの賛同が得られず、なかなか難しいようです。そういう人にもポストをうまく割り振ってやるのが議長を経験した自民党長老議員たちの仕事なのです。

事実彼は、私と同期でいま一三年目の議員生活に入ったところですが、過去一二年を調べると、八年間、厚生常任委員会に所属し、その半分の四回、委員長をしています。

ある時、長老議員が笑いながら冗談を飛ばしました。「委員長にでもしといたら寝てられへんやろう。ハハハ」と。

かたや私は、質問を熱心にする議員ゆえに、一二年間一度として委員長になったこと

もなく、保母の経験があり子育て政策に特に関心が強く、環境政策には特に力を入れてきたがゆえに、大事な案件がある年には、排除されて絶対に委員会に入れませんでした。地方議会は納得のいかないう理不尽さだらけです。

毎年繰り返される五月臨時議会の役員選挙は、議長、副議長、その他の役を誰が取るかという、多数会派の役の分捕り合戦の醜さに振り回される、少数会派の私にとっては屈辱の議会でした。

## 傍聴者を閉め出す パワーハラスメント

平成一八年度の決算特別委員会、私がやっと八年ぶりに委員として審議に参加できた年でした。私ははりきって、ここにここと気合を入れて委員会室に入って行きました。

議員は一二名、議員席は一列に四人、三列構成となっており、最前列の真ん中の席が空いていました。

私はそこに座り、前に座っている職員さんたちに微笑みながら、「八年ぶりの決算委員会ですよ。嬉しいなあ！」と、私を排除し続けた議会に、

冗談まじりの皮肉を飛ばしました。目の前の職員さんたちはここにここと笑いました。

ところが、待ち構えていた長老の委員長は、開口一番、「嬉しいとか、そういう問題ではない」と怒気を含んだ一言をかましてきました。

いつものことで慣れているとはいえ、嫌な予感がしました。今時の若者風の言い方をすれば、「おい、おい、朝一番、いきなりそれで来る？ なごやかに行こうよ」という感じでしよう。

嫌な予感の中しました。その後の質疑では、他の議員が手を挙げていた時は、絶対に私にあてず、私はいつも最後に、さも嫌々指名しているというような名前の呼び方をして指名されました。どうせ最後に指名されるのだからと思つて頃合を見計らって手を挙げると、今度は、「手を挙げるのが遅い」と言つて指名をしぶります。

委員長の卑怯な作戦は、時間を経つにつれて露骨になってきました。午後三時半、休憩をとつて今後の進め方を話しあっていた時、「今日は夕方一時間ほど休憩をとつて、引き続き審議します。各自で夜食を食べておくように」といいます。

私が「まだ一日目ですし、

五時半で終わりましたよ」といつても、委員長の権限だといわんばかりの顔をしていました。重ねて「いつまでですつもりですか」と問い質すと、「まあ九時半頃までかな」と言葉をにこしました。

日程は四日間とつているので、一日目に夜まで審議しなければならぬ理由はまったくありません。

この時私は、まだ例年どおりのスケジュールで行くと油断してしまいました。例年は、一日目は総括質疑と総務費の途中までで終わるのです。

ところが、その後の審議は、通常なら二日目で審議する民生費（福祉関係、保育所等）を猛烈なスピードで終わり、さらに通常なら三日目で審議する衛生費（環境事業等）まで含む全体の八割くらいの審議内容を、一日目に突っ走つたのです。

夜九時半を過ぎても終わる気配はありません。

もう質疑するのは私と共産党だけとなり、他の議員は質問を投げ出したかのように、一言も発言しません。

いったいどこまですすめるかと考えているのか、全くわかりません。しかも、「環境衛生費」では、私の手をあげるタイミングが遅いと言つて、質問させませんでした。



え・西田淑子

私は「もう少しゆっくりと進行してください」と強く抗議しましたが、委員長はマイクを切って「黙れ。だいたいあんたは普段から反抗的なんだよ」と、審議に関係ない私に対する悪口を吐き、とうとう質問させませんでした。

そこで委員長と激しく言い争ってしまった私には、後は議事進行を止めるすべもありませんでした。私が異議を唱えれば、もっと逆上してさらにヒステリー状態になったでしょう。

ついに午後一一時五〇分頃、翌日への時間延長を委員長が提案したとき、たまりかねた私と共産党は、翌日にまたがる審議に反対して異議を唱えましたが、採決した結果、委員長の強行な議事運営に三会派の委員が全員賛成し、三対八で続行が決まりました

### 「傍聴者閉め出し作戦」

真夜中の審議は、誰が見ても明らかな騙しうちでした。

職員入れ替えの時にも、休憩を五分だけしかとらず、議員を全員自席で待機させたのも、後で思えば、私に外部との連絡をとらせず、傍聴者をシャットアウトする作戦だったのです。すべては用意周到

に仕組まれていたのです。後で考えれば、彼の狙いは、市民の反対運動が根強く、裁判まで起こされている廃プラ処理施設問題をなんとかして傍聴者が誰もいない中で終えてしまうことにあったのです。

二日目以降になれば、いつものように傍聴者が押し寄せてくることは明らかです。選挙の前の年です。傍聴者の目は怖かったのでしょうか。

他の与党会派の議員には事前に根回しをしていたようです。あの異常事態に誰も異議を唱えなかったのはどうみても不自然です。

私を含めて反対党の議員は、三日目に質疑する予定の資料を持っておらず、資料もない中で議論させられ、無理に審議を終えさせられてしまったのです。

環境衛生費の質疑を終えたのは午前一時前でした。

### 眠れぬ夜

なぜか運悪くパンクしていた自転車を押しとぼとぼと歩いて帰りながら、あまりにもひどい精神的暴力を長時間受け続けた上、密室の理不尽な討議で審議を終えさせられた屈辱感でうちのめされ、怒りの涙があふれてとまりませ

んでした。私は必死で深呼吸を繰り返して、野や山に遊んだ子どもの頃を頭の中でイメージして、心を落ち着けました。

その夜は一睡もできなかったのはいうまでもありません。

しかし、このまま負けるわけにはいきません。二日目は気を取り直して、朝一番に傍聴呼びかけの電話をかけたので、午前中は一六名の傍聴者が駆けつけてくれました。

お陰で、委員長も昨日とは打って変わって態度をつくり、昨日の夜は全く質問しなかった議員たちが、競って質問をしたのは、あきれはてる思いでした。

休憩時間になって、傍聴の女性が、「真夜中の一時まで審議を引き延ばして、私たちの傍聴の権利を奪わないでください」と委員長に強い抗議をした時、「大きな声で言わ

んでも聞こえる」と、大声で怒鳴ったので、傍聴者の男性が助っ人に入るといふ場面もありました。

### 天網恢々 疎にしてもらむぞう

悪いことはいつまでもできないものです。かなりの不満がたまっていたのでしようか。ついにクーデターは起きました。

今年春の選挙で、最大会派に所属していたがゆえにボス議員として好き放題やってきた決算委員会の委員長だった議員が、ついに会派を放り出されて一人（無会派）になってしまったのです。

二期目、私が一人会派で「市民派」という会派名を名乗ったとき、「一人は会派と認めない、無会派だ」と主張して、決算特別委員会に四年間一度も入れなくしてしまつたボス議員。さまざま「一人会派はじめのルール」を作つたボス議員が、自分で作つたルールに、今度は自分が縛られることになってしまったのです。

皮肉なことに、私の政務調査費の使途報告書や領収書を議長としてチェックした彼は、その後、政務調査費の使途が不明として、住民監査請

求を経て裁判に訴えられ、返還命令を出されている会派のボスでもありました。私が裁かずとも、天が裁くというのを、彼は自らしつかりと証明してくれました。

さて、皆さんの地元の議会はどうな状態でしょうか。どうぞ、傍聴に行ってください。密室の議会の扉を市民の力で開いてください。できるなら自ら飛び込んで議会を変えてください。

それが無理なら、誰かを応援する。一生のうちで、一度くらい自分にできる関わり方を試してみればどうでしょう。せつかくの参政権、黙って指をくわえて引き下がっている手はありません。

私は思う存分、やりたいことを、全力を尽くしてやりきりました。悔いはありません。市民の力も見えだし、「市民派」の旗を二二年間、高々と風になびかせました。

今はちよつと疲れたので休みますが、まだ政治をあきらめてはいません。女性たちが本気で動かなくちゃ、政治は決してよくなりません。今、この国に欠けているのは、国民一人ひとりの、「政治に対する責任の自覚」です。（よしもとひろこ・前寝屋川市会議員）

### 女性の地方議員は増えている

●日本女性はあまり政治的ではないと思われてはいるが、それでも投票場に足を運ぶのは一般に女性のほうが男性より多い。しかも自治体の女性議員は着実に増えている。

今回の統一地方選では、東京、茨城、沖縄を除くすべての府県で女性候補者が立った。とはいえ全女性候補者は三六七人で候補者全体の九・七％。ただしそのうち一九〇人（七・五％）が当選、候補者の人数は過去二番目に多く、当選者の人数・割合とも過去最高となっている。

知事候補者はしかしやはり少ない。女性候補者が立ったのは六都道府県だけ、そのうち北海道で現職の高橋はるみ氏が当選した。ただしもとエリート官僚の高橋氏は自民・公明両党の推薦であり、生え抜きの市民派とは言いがたい。知事への進出はハードルが高いと言えそうである。

●各政党に占める女性候補者と当選者の比率はどうか。多い方から並べると、共産党（四二・三％／五〇・〇％）社民党（二四・九％／二二・五％）、民主党（一一・一％／一一・二％）、公明党（六・六％／六・六％）、自民党（二・二％／二・二％）と、ピンからキリという感じの大差があることがわかる。何と言ってもダントツに女性候補者が多く、しかも当選者が多いのは共産党であって、各地域におけるこの党の議員候補者や議員を實際に知っている人は、共産党がつねにすぐれた女性候補者を擁立し、当選させている現実を知っている。どこからこんな……と思うほど、この党はすばらしい女性候補者をそろえている。

●これに引き換え、女性の候補者数も当選者の率もおそろしく低いのは自民党。公明党も女性議員が多いと言われているわりに意外やその率はあまり高くはない。自民党には根強い女性蔑視の風潮が残っているが、そのことはこの数値にも表れているようだ。

女性当選者の率が一〇％以上を占めたのは長野県、滋賀県、奈良県、鳥取県をはじめ九県で、前回は四県しかなかったことを考えると、女性地方議員の前途は明るい。（K）



吉本ひろ子さん



# 一党独裁をしたたかに生きる ベトナム人のエネルギー

竹内みどり

この自転車も夜中に消えた

通りを埋め尽くすバイクの洪水、市場の喧噪。ベトナム戦争を勝ち抜いた人々は、いま共産党一党独裁をしたたかに生き抜いている。

現地駐在員として

ああ、  
わが自転車戦争

ベトナムは一度訪れると、二度、三度とやみつきになる人が多いという。豊かな自然、やたべものの魅力もさることながら、自然とは対極の、通りを埋め尽くすバイクの洪水、市場の喧噪……。この国の人々が発散する強烈な「エネルギー」は人々を惹きつけてやまない。私もそんなエネルギーにすっかり魅せられた一人だが、それが、なぜあのベトナム戦争を勝利し、人々が共産党一党独裁をしたたかに生き抜いているかの謎解きの鍵でもあるのではないだろうか。

私は、昨年の四月から今年の二月まで一〇か月ベトナムの中部ダナンに滞在した。所属する「ふえみん婦人民主クラブ」というNGOの団体が、一二年前から支援しているダナンの養護施設「希望の村」現地駐在員として赴任することになったからだ。ダナンは一九六五年、アメリカ海軍が米兵三五〇〇人を港に上陸させ、本格的にベトナム戦争に介入していった所としても名高いベトナム第四の都市だが、ホーチミン、ハノイに比して海を擁して自然の豊かな素朴なたたずまいだ。

人々の通勤はほとんどバイクだが、私はバイクは怖いし、自転車で通うことにし、大家の古い自転車を借りることにした。それが「ベトナム人」を思い知る「わが自転車戦争」の始まりだった。

一週間ほどしてペタルがこわれてしまい、修理屋に行くが必要な部品は他の店から買ってこいという。部品が合わない、又別なのを買ってこいと。えーっ、なんだ、それ？

この自転車はその後、ペタル、車輪、ブレーキと毎週のようにどこかがこわれ続け、憤慨して「一週間前に直したばかりだ！」といってみても「それで？」という顔をされるだけ。都合一〇回くらい修理屋に持っていく、結果、左右のペタルの色と前後の車輪の色の異なる実にマニアックな自転車に変身した。

三か月後、門に施錠したわが家の庭にカギをして駐輪させていたのに、夜間忽然と消え失せた。近隣の家も根こそぎやられたが、暗躍する窃盗団の仕業だった。

自転車は滞在中二台失ったが、自転車屋、修理屋、部品

屋、窃盗団と実に多くの人々に寄与し続けたあげく、一台目は古い自転車なのに、大家の所有物だったので、退居時に一三〇ドル（超高級新品自転車を買える！）もする湯沸かし器を代わりに置いていけと、弁償させられてしまった。何てこった！

ベトナム人のしたたかさを、いやというほど思い知らされた「自転車戦争」だったが、かくの如く、その後も巨大なアメリカ軍をうち負かしたDNAに、私は町のあちこちで出会い続けたのだった。

## 空前の起業ブーム

ベトナム戦争後、ベトナムは世界の最極貧国の一つになり、街にはストリートチルドレンがあふれ、幼い子ども達が外国人とみかければ物乞いする姿が至る所に見かけられた。

一九八六年、共産党はドイモイ（刷新）路線を宣言、経済基盤を一新し、社会主義計画経済からの脱却と市場経済化へ大きく政策を転換した。そして二一世紀はじめから七パーセント代の経済成長を記録、アジアでは中国に次ぐ高成長国となった。海外からの投資、政府の内需拡大策もあって、最近では

空前の起業ブームを起こし、町には新しい店が続々と出現している。

経済的には日本の昭和三〇年代に似ているともいわれるが、その風景の中に、高額の家電やIT機器があふれ、人々の物欲をそそっている。

私の知り合いの女性も、アークセサリー店、レストランと次々に起業したり閉業したり。最近始めた高級米販売の店は大きな三階のビルにセレブな家具をしつらえ、初めから一〇人もの従業員を雇った。その大ざっぱな見通しの甘さはいかにも「ベトナム風」で、六か月であえなく閉鎖となるのだが、又、こりもせず、次の起業を企てている。

「お金をもうけたい！」とはっきり目的をいい、まだ二歳の幼子を抱え、毎日、早朝から夜一二時過ぎまで働き、めげることを知らない。

## 勉強して金持ちに！

一九九〇年台半ば以降から、外国企業が専門知識のある若者を雇用し始めると、能力主義的な雇用体系が導入されるようになってきた。一般労働者の場合月給は六〇ドル（七、〇〇〇円）〜八〇ドルだが、大卒以上の技師・専門家は三〇〇〜一〇〇〇ドル

（二・三万円）程度の給与を得、格差社会が広がり始めてきた。より高い賃金を求めて職を得ようとするので、最近では技能や語学を身につけるため、学生や勤労者で夜間学校に通うものが多い。私の仕事のオフィスは日本語学校の一角にあり、私も週に一日この学校の日本語会話クラスを持ったが、学生の旺盛な学習意欲に圧倒され続けた。若手女性弁護士ハーさんは、「日本語ができる弁護士には日本の企業からたくさん仕事ができます」と昼間仕事をこなした上、週三日の夜の日本語クラスに通ってきている。

支援している「希望の村」には一五〇人の子どもが生活しているが、親がいないなど貧しく、みなこの格差社会の底辺に投げ出されている子どもたちだ。小さい頃から学習する環境がなく、高校卒業のテストにも不合格になる子どもも多い中、今回の私の駐在の目的は、職業訓練など将来の自立のための支援推進だった。

卒業生の一人、ランさんは非常に優秀で、一昨年経済専門学校に進学した。高校時代から英語が達者で、昨年、夜間の英語科の大学にも進学。さらに、どうしても日本語を勉強したいといって、日本語

の専門学校にも通い始め、里親の支援で現在三つの学校に通っている。日本語学校ではクラスで一番の成績。「日本とベトナムの架け橋になりました！」と意欲満々で、その目の輝きは日本の学生にはお目にかかれないものだ。

ベトナムの教育は五・四・三制、初等教育の就学率は九〇％で、途上国としては教育レベルは高い。義務教育は中学校までだが、授業が午前のみ・午後のみで二部制になっているところがまだまだ多い。

教育における「ドイモイ」政策として、一九九八年に「教育法」を制定、民族独立と社会主義を理念とする「国家教育」を基本としつつ、教

育の「市場化」の導入も行われた。これにより、義務教育段階から「選抜学級」などが各区の公立学校に設置されているし、私立学校も開校され、全日授業、外国語の早期教育、コンピューター教育などが行われている。

## 生き抜くたくましさ

農村から職を求めて都市部に流れてくる人口が急増しているが、ほとんど中卒以下の技能を持たない農民で、建設労働者、バイクタクシー、野菜・果物の担ぎ売りなどに従事している。売春に流れる女性も多く、近年、ベトナム女性性は国境を越えた人身売買の対象になり、カンボジアなど

市場の魚売り





ではベトナム人少女売春が深刻である。

富裕層の子どもたちは塾などに忙しい一方、貧しい子どもたちは未だに夜遅くまで家族のために仕事をする。食堂に入れば必ず五、六歳から一〇歳にも満たない子のガム売り攻勢にあうし、なつくくなじみになれば時々買わないわけにもいかない。はだしの靴磨きの少年は細ひものサンダルの靴を磨こうとして私に撃退されながら、夜の一〇時を越えて働いている。

北の少数民族、モン族の村を訪れた時は、幼い少女たちが学校に行かず、頼みもしないのにガイドのごとく一日中ついてきて、危ない橋は手をつないで助けてくれ、あげくにしつこく民族雑貨を五〇円、一〇〇円で売ってくる。ある村では顔を真っ赤にした老いた女性が私に抱きつき、大歓迎してくれた。プーンとにおうアルコール。仕事もなく、政府からの助成金がアルコールに消えているという。

どうやら私を助成金を持ってきた政府の役人と勘違いしたようだが、お金がないとわかると、ぶいどどこかへ行ってしまった。

海鮮料理店で私達が残したエビをつまみ上げ、その場で

食べ尽くし、私のコップの水で指を洗って、悠然と去っていった七〇過ぎの女性も強烈な印象だった。

## 働き者の女たち

貧しい女性達の生き抜くエネルギーに驚嘆するが、ともかく私を惹きつけ続けるのはベトナムの女たちだ。元気によく働き、活気にあふれている。

着任してまず行なったのが通訳兼パートナーの募集。新聞広告をだし応募してきた一人に面接しパートナーとなったのが三三歳のタオさんだ。日本語・英語が堪能、人脈も広く、仕事の上で私が希望するどんなこともいとわず実現してくれる。そのひたむきさ、誠実さはベトナム女性の一つの典型ではないだろうか。

祭りで子どもたちにあげる大量のおやつを町中バイクで走りまわり、一番安くおいしいお菓子を探してきてくれたときの感激！

市場の女たちも魅力的だ。夕方人々でごった返している市場に行くと、そこでは売り手、買い手の九九パーセントが女性である。大声を上げて元気に客引きをしている売り子の女達の人なつこい顔。こ

の市場でどれだけ店番の女たちと語り、ベトナム語の勉強をさせてもらったことか。中には、お前には売らないと、ハエでも追うように、私を追っ払うやつもいたな！

ある農民の女性は、朝三時頃に起床、まだ暗い中、町の市場で野菜を売りさばく。七時頃帰宅、昼まで畑の仕事。昼食後のそうじ、午後は野菜の収穫、夕方は、洗濯と食事の支度……、といった具合で休みもなく働きづめだ。

ところで男は、どこにいったしまったか？ 探してみると、いるいる、表通りに軒を連ねる屋台の飲み屋に夕方男達があふれかえっているのだ。カフェは男達のたまり場になっていて昼間からトランプなどに興じているのはベトナム七不思議の一つ。

ベトナム人の総労働時間を男女で比較すると、四、五時間女性の労働時間が長いというが、実感だ。

## 家族がいのちの宝

ベトナム人の意識の中には「家族」「一族」への鮮明な帰属意識がある。誰でも、知り合えばまず家族のことをきいてくる。家族を日本において、一人でベトナムに来るなん



て、と不思議な顔をして私をみる。家族は人々の心のよりどころであり、両親や老人を敬い、いつも何か役立つとうと考えている。

希望の村の子ども達の里親への手紙には「勉強してお金を稼ぎ、妹・弟の面倒を見るのが私の責任です」とけなげな文面が多い。アメリカ、オーストラリア、日本などポトピープルとして様々な国に脱出し活躍するものも多いが、金持ちといわれる人の財源は、こうした親戚の「ベト僑」からの送金であることもよくある。

三世代、四世代と家族が同居することも多く、子どもの養育など大家族主義の良さがある反面、辛い嫁の立場は「オシン」といわれていると、「嫁」の立場のパートナーのタオさんはいう。

「子どもは二人まで」という政策から、男子の誕生が熱望され、一人目が女の場合、次は男を生むために食生活を始め様々な工夫をしている、という知り合いもいた。

ベトナムの女性は社会的にはまだまだ地位が確立されていないが、家庭の中の発言権は強く、派手な夫婦げんかもよくある話。女性自身が「家を守る」意識が強く、「家事は女性の仕事」と思う人が多

い。首都のハノイなど北では、男性が家事を協同してやるという意識が高くなっているという。

## 男女平等法が今年施行される

ベトナムの女性団体に「女性連合会」という大きな組織がある。共産党下部組織の「ベトナム祖国戦線」という政治連合団体の一つである。

この団体が中心となり、二〇〇四年から男女平等法の策定が始まり、今年七月に発効する。

これに女性連合の代表として関わったハー・ティ・バンさんに話を聞く機会があった。この法律を作る過程で、「日本の男女平等に関する法律も大いに参考にさせてもらいました」という。

「女性に関する問題を男性との関わりで解決することが大事です。そのために関連機関の責任を定めたのです」と。「国会議員の女性の比率は二七・三%。アジアの中で一番高い比率」と胸をはるバンさんは、産休を最近取り終わっただばかりの若手のホープである。

いわゆるドイモイ憲法といわれる現行の憲法（一九九二年）は「人民の人民による人

民のための法治国家」と記されているが、実際は法の支配よりも、党の指導が上位にある。

しかし最近では、農民や少数民族の暴動、現政権の右派・左派からの抵抗もあり、政府は二〇〇一年の憲法修正で「上からの民主化」をすずめ、ドイモイが政治にも及んで来ている。

選挙は一八歳以上の国民による直接選挙。二〇〇二年の憲法修正後、初の国会選挙では、一・五倍の出馬があり、当選者は九〇%が共産党員だが非党員も当選している。

地域によっては、党員候補と新興実業家勢力などを代表する非党員候補との、活発な選挙戦も行われており、ベト

ナム民主化の流れが現れてきている。だが多くの選挙戦では、まだ選挙前に隣組的な「祖国戦線」が活躍し、組織の推薦によって選ばれた人物に対する信任投票であることが多い。

## 政治の話はタブー

滞在中、私は何度となく、ベトナム人に政治についての話を持ちかけたが、ほとんど話を聞くことはできなかった。ここでは、政治の話はタブーである。

最も親しい友人のトンさんにも何度か政治について意見を聞いてみた。私は普通のベトナム人の中で暮らしたく、知人の家を借家することにな

ったが、トンさんはその隣に住む五〇歳の女性である。借りた家は古い伝統的な構造で、台所には水もコンロもなくびっくり。トイレの前にある水回りに腰を下ろして悪戦苦闘して料理する私をみていて、困ったことは何でも世話してくれた。よく塀越しに作ったばかりの食事を届けてくれ、ベトナム料理を習いたいと言えば、鍋釜下げて教えに来てくれた。八〇年代にポトピープルとしてダナンを脱出、数日後風に遭い、港に戻ったところを逮捕されたという、いわば「前歴者」である。

そのためもあって、長い間仕事に恵まれず、老いた母の面倒をみてきた。トンさんとは旅行をするほ



菓子売りの女性。撮影代を取られました。



市場で

## 賄賂で入居???

ど親しくなり、いろいろな話しをするようになったが、それでも政治の話をすると思議な笑みを浮かべ話題を変える。「公安がうるさいからね」と小声でいいながら、軍隊が国を外から守る国防を任務とするに對して、公安とは国内の治安を目的とするが、人々の行動をマークしたり、反体制を取り締まる面が強く、人々からとても恐れられている。又、公的権力を乱用し一般市民から賄賂を取ることが日常化し、人々は公安の存在を相当うとましく思っている。

私自身も家を借り引越したものの、公安の許可がなかなか下りず、一度家から追い出され、下着やふとんを手

## たくましく生活を 楽しむ

裁判官、公安、新聞記者など  
もいた。

そんな中で、ベトナム人は  
暗い顔をして生活しているか

持ったまま、途方に暮れたことがあった。公安に行くたびに新たに違う書類の請求をされ、何度も足を運ぶことになった。夕方の四時頃行ったとき、

今から会議があるから明日こいとニコリともせず言い放たれ、頭に来ていると、大家が「賄賂を出す」といつてきた。その直後にあつという間に許可書が下りたのには驚いてしまった。二〇〇一年の「マフィア・ナムカムとその一味」が逮捕された事件はこちらではつとに有名。

買収で逮捕された中には、

という、全くそんなことはない。いたってマイペースにゆつたりと自分たちの暮らしを楽しんでいるのだ。

朝は早く、七時半始業が一般だが、遅刻は日常。逆に帰りの時間はくもの子を散らす勢いで帰っていく。昼間も二時間半の昼休みをたっぷり。自分の生活をまず優先、家族や友人との語らい、カラオケ、バイクのツーリングデートなどを心ゆくまで楽しんでいる。

美容院に行つて毛染めをした時のこと。まず、溶液を頭にぬつた後に「使用法は日本語で何と書いてあるの」と見せられた箱がビゲンだった。やり方も知らないで人の頭につけるなよ、と思いつながら「二〇分ほどおく」と“客”の私が説明する。それから、そばで家族との食事と盛大なおしゃべりが始まった。二〇分たつても来る気配がない。ようやく食事が終わり、頭を洗面器の水（お湯ではない！）で洗つたのは一時間近くたつてのこと。

## おせっかいな人々、 生きている共同体

人々は家に大きな仏壇を備え、冠婚葬祭も実に盛んで、まつりごとでは、男達が活躍

躍、親戚、近所が集まつては大宴会を開いている。

宗教は南北統一後、統制された面もあるが、仏教、キリスト教など公認宗教が六つあり、ドイモイ以降盛んになっている。

葬式では、朝の四時半からあたりには響き渡る読経が始まる。慶事では立て込んだ家並みの中でカラオケを大音響で歌い、騒音問題などどこ吹く風、身近な遊びを楽しんでいる。

ベトナムの路地裏にはサツカー、小石を使ったお手玉遊び、ゴム飛びなど、日本では絶えて見ない地域の子どもの遊びが集つて夢中で遊んでおり、絶え間ない歓声が聞こえる。お兄ちゃんが妹を背に一緒に遊んでいる姿は懐かしい風景だ。

子どもたちのけんかも見かけるが、日本のようないじめに発展することはないように、タオさんも「いじめで自殺」という日本の報道に首をかしげるばかりだ。「異年齢集団」が、けんかをほどよく仲裁している。

わが家は、ヤモリ、ネズミ、カエル、アリ、ゴキブリなんでもござれの動物園と化していたが、蚊の大群に襲われ、同居人の二六歳の日本人女性が、蚊が媒介するデング熱と

いう熱帯病に倒れたことがあった。「ベトコン蚊」とあだ名をつけた強力なベトナムの蚊は、私たちが持ち込んだ日本製の蚊取り線香の煙の中を悠然と飛び続けていたものだ。

当人は高熱でぐつたりとして、ともかくただ寝ていたいのに、友人・近隣の住人が千客万来、やれジュースを飲め、やれ体が痛いならもんであげ、果ては病院に泊まってくれた人もいて、何事につけベトナム人は並はずれて親切、おせっかいこの上ない。

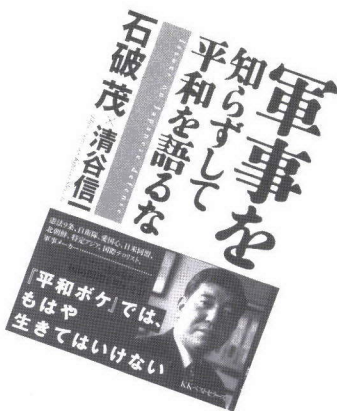
家族を核とした地域の共同体の中で、人々は「共産党の指導」を適当にくぐりぬけ、公安の監視をかわし、したたかに楽しくマイペースに生きているというのが、私の出会つた「ベトナム人」たちだ。政府も又、「共産主義」という固い皮に「市場化」のあんを包み込んだ不思議なまんじゅうを考案、したたかに壮大な実験をしているように見える。

ベトナム人に散々してやられたことも多かつたが、この国の人々が発散するたくましいエネルギーが私を元気にしてくれ、又かの地に行きたいという気分にはさせるのだ。（たけうちみどり・中学教諭フリーランスライター）

# 読む BOOK! !?

石破茂・清谷信一著  
薄井雅子翻訳・共著

軍事を知らずして  
平和を語るな



KKベストセラーズ  
(本体価格1500円+税)

石破茂氏は、小泉首相のも

とで防衛庁長官を務めた人物。国民は歴代防衛庁長官の顔をほとんど覚えていないが、この人の大きな顔や大まかな目鼻立ちをよく知られている。銀行勤務を経て政界に進出したという経歴であるが、自民党きつての防衛政策通とされている。

対する清谷信一氏は、軍事ジャーナリストで作家。兵器カタログの編集や戦争物のパソコンゲームのシナリオなども手がけているという。世界の兵器に関する精密な知識を持った人物である。

この本は、官と民との軍事マニアが、軍事に関する日本人の無知を嘆きながら、日本の今後の国防政策について縦横に語り合った対談記録になっている。

二人がいきなり意気投合して盛り上がるのは、今の自衛隊は日本の国内法に拘束されている、軍隊として自由に行動できない点だ。

石破氏は、自衛隊の戦車は能力を落としてでも排ガス規制に従って改修させられるし、方向指示器まで一般車両に準ずる必要があるし、とグチを言う。

清谷氏は、戦車が敵の追撃を受けて撤退しているときに料金所で料金を払わされるし、上陸してきた敵を迎え撃つために塹壕を掘るにも、建築基準法に従って地主と交渉しなければならぬし、法律を遵守していると自衛隊はまったく戦えないと怒りをあらわにする。

それに応じて石破氏は、日本に攻めてくる国の戦車は赤信号で止まらないし、穴を掘るにも地主に交渉などしない、日本の法律を守らない連中と戦うのにこっちが法律を守っていたら負けるに決まっている、これではひどすぎるってことで、私が長官のとき是有事法制ができたわけですから、と語っている。

よ、と語っている。

このやりとりを読む者は、有事立法の意味が明瞭に理解できる。反対派の著作を読むよりも理解しやすいかもしれない。

それにしても、彼らの頭の中にある想像図がリアルなことに驚く。二人とも、日本に外国の軍隊が上陸して戦車が高速道路を走り、塹壕で兵士が銃を構えている映像を思い浮かべながら対話しているのだ。

石破氏が防衛庁長官だったころ、執務室は、戦車や護衛艦や戦闘機のプラモデルで一杯だった。アメリカ政府や米軍の要人が来訪するときに、その経歴を調べ、たとえばキティホークに乗っていた人にはその模型を出しておく。すると相手は驚きの声をあげ打ち解けた態度になったという。ロシアの国防大臣が来るときには適当な模型がなく、石破長官自ら三晩かけて

ロシアの空母のプラモデルを作り、大喜びされたそうだ。

もてなし精神旺盛なのはいいが、戦争ごっこが好きな男の子の感覚が国防政策に影響するのはどうであろうか。

二人は、日本は核兵器、生物兵器、化学兵器という三種の攻撃を受けた世界唯一の国だから、有事の対策が大切だと力説している。

核兵器が広島と長崎で使われたことはわかる。ところが生物兵器とはオウム真理教が東京の亀戸で炭疽菌を撒いたこと、化学兵器とは地下鉄サリン事件のことなのだ。警察が、坂本弁護士一家拉致事件の捜査を真面目に行っていたら、あとに続く事件は阻止できたであろう。これを軍隊による国防の話と結びつけるのは、無理がありすぎる。とはいえ、この本から学ぶものは大きい。現代の軍隊は徴兵制で無差別に兵隊を集めるよりも、兵器の操作ができる

るエキスパートを必要としていること。

武器輸出を制限する諸原則は、ソニーのビデオカメラやトヨタのランドクルーザーが戦争に使われている時代にそぐわないものになっていること。

そして戦争を回避したい人々も、さまざまな兵器の名称や特徴を知る必要があること。

この数日の間にも、駅前で九条を守ろうと呼びかけるビラを受け取り、友人知人からも郵便やメールが届いた。平和のために運動する人は、自分と違う発想の意見を知り、オイオイそがおかしいでしょ、とツツコミを入れながら、考えを形成すべきではないだろうか。この本は、「世界」や「週刊金曜日」を読んでいる人にこそ、手にしてほしいと思う。(すずきゆみこ フリーランライター)

●「社保庁が振り込み詐欺とは知らなんだ」と毎日新聞の「万能川流」欄で皮肉られた社会保険庁の大失態。公的年金保険料の納付記録が五千万件以上不明になってしまったという。なかには破棄されてしまったものさえあって、おかみは国民が営々と払い続けてきた年金保険支払いの証拠を失ってしまったのである。

これほど大規模に、徹底的に、お役所がその無責任さを露呈した不祥事は、明治以来例がないと言つてよいだろう。

●おそろしいのはこうした「無責任」姿勢が、日本社会のシステムの各所に蔓延しつつあるように見えることである。

この四月、大手の生命保険会社数社が、支払い保険金の二六三億円を「不払い」にしていた事実が公表された。この事件でも、システムの中で働く人々が、「言つてこなければそのまま」という無責任姿勢で支払うべき預かり金を扱っていたムードは、完全に共通している。

この国は深いところで崩れつつあるのではないだろうか。

●四月、国連の「地球温暖化問題作業部会」は、地球温暖化のもたらす結果についての第四次評価報告書を採択した。「温暖化」の現実が単なる自然の気候変動によるものでなく、人間活動のもたらすおそろべき結果であるという事実は、この報告書によつて完全に公認のものとなった感がある。

国連の「お墨つき」を得て、日本の憶病なマスコミも、ようやくこの問題を大きく報道し始めた。アメリカのブッシュ大統領の無責任姿勢にも、変化の兆しが見え始めている。

しかしことは簡単ではない。環境問題の背後には、あらゆるエネルギーを石油に依存している先進国の現実があり、人々が現在の快適さを投げ捨て、どれほど真剣に「地球のために」環境保護の立場をとり得るかは予断を許さない。日本はCO<sub>2</sub>削減の基準さえ達成していない。おまけに先進国には、後進国からCO<sub>2</sub>排出量を買いたいという抜け道さえ用意されている。国連はどこまで本気でこの問題に取り組もうとしているのだろうか。

国という組織が、来るべき悲劇を回避するため先見の明を発揮した事実は、歴史上ほとんど例がない。人類はつねに、数十万、数百万の人々の死という犠牲を経て、ようやく自分たちの愚かさ目覚めるといふ歴史を繰り返してきた。次の参院選にも「環境」を旗印に政治を動かそうという候補者は数えるほどしかない。

「地球環境保全」が人類共通の目的になるのはいつのことだろうか。

### 女の政治日誌 — 四月から六月まで —

▼四月の東京の統一地方選では、予想どおり石原慎太郎前知事が三選された。市民派・女性派のホープとして出馬した浅野史郎氏は、力およばず。女性都民の多数が、石原氏の女性蔑視に無頓着なのは不思議である。

▼イラク特措法改正案、教育関連三法案が六月二日、参議院を通過して成立。国民投票法案も衆議院を通過し、参議院通過を待つばかり。

「教の暴力だ」「議論が尽くせていない」とくり返す野党は、採決の度に議長席に押しかけ、議長に詰め寄るが、どれも田舎芝居さながらのパフォーマンス。

「議論が尽くせていない」というが、野党も野党、どうしてもつと実のある論戦ができないのか。

型にはまっていなければ、枝葉末節をこねくり回す、たまに弁舌さわやかと思えば自己顕示欲見え見えの長広舌、相手の失点をよいことにかさにかかり、やくざもどきに言いつつる品のなさ——「国会

論戦」の名に値しないやりとりが多すぎる。

政府答弁も答弁で、小泉前首相のお家芸のはぐらかしはさすがにないものの、肝心のことは答えず故意に核心をはずす答えが多い。その逃げを効果的に突っ込めず、結局は是認してしまう野党。胸のすくような論戦を一度でいいから聞いてみたいものである。

▼松岡利勝農水省大臣が自殺。現職の大臣の自殺は戦後国会史上初めてのこと。もちろんその背後にあるのは、政・業・官の癒着による大がかりな汚職の構造であろう。自分以外の人間に迷惑がかかると思い詰めて取った行動であるに違いない。

▼政府とアメリカの合意があればこそ、検察は自信満々、「談合」の摘発は続く。それがどんな結果となつてはね返ってくるのか、まだ読み切れない現在である。

▼今年四月から発効した、離婚した妻への夫の年金分割の法改正をうけて、去年まで減りつづけていた離婚が思ったとおり増加しはじめた。もっとも法改正でワリをくうのは政府ではなく、単に夫だけである。